

# 「一人一人の教育的ニーズに応じた授業づくりに関する研究」(第2年次)

— 保護者との連携を通して —

## I 研究の趣旨

特別支援教育は、生活や学習上の様々な困難を抱える子どもたち一人一人の「教育的ニーズ」に応じた適切な教育的支援の実現を目指すものである。

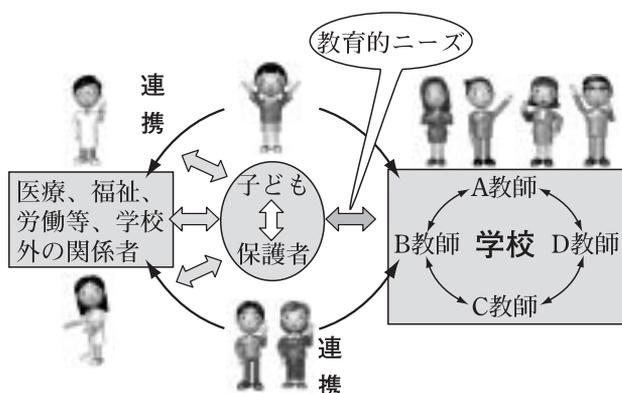
支援の出発点となる「教育的ニーズ」の把握にあたっては、教師間の連携や、保護者をはじめとした医療、福祉、労働関係など学校外の関係者との連携が重要といえる。また、授業実践も「教育的ニーズ」との関連で見直すことが必要と思われる。

そこで、本研究では、「一人一人の教育的ニーズに応じた授業づくり」を通して、「教育的ニーズ」を把握することや、適切な教育的支援とはどうあるべきかを明らかにし、特別支援教育の実現に向けた具体的な取り組みを見出していきたい。

## II 研究の構想

「教育的ニーズ」は、子どもの実態だけではなく、子ども自身の意向や保護者及び学校外の関係者からの情報を踏まえ、子どもの視点に立って把握するとともに、学校の教育内容との関連で把握することが必要と考える。そこで本研究では、「教育的ニーズ」を「子どもが必要とする教育内容」ととらえ、また、学校内外の関係者との連携を「授業づくりのための連携」と位置づけて研究を進めることにする。

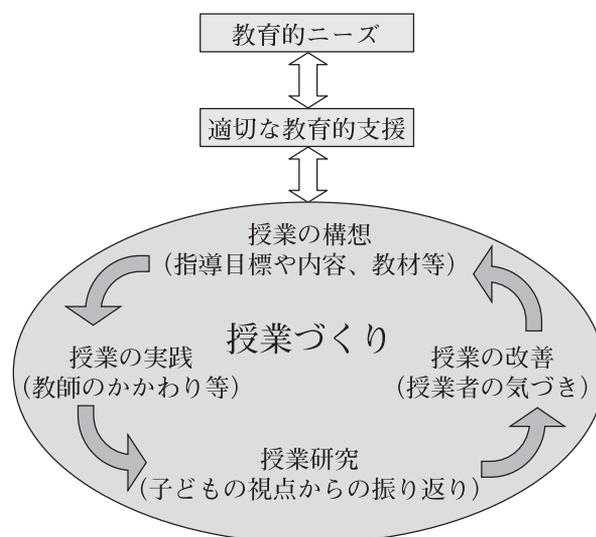
【授業づくりのための連携】



これまでの教育実践においても、学校内外の関係者と様々な形で連携し、子どもの主体的な取り組みを大切にしており、子どもの「教育的ニーズ」と無関係ではない。しかし、今後は「教育的ニーズ」を明確にした教育実践が求められるため、研究を進めるにあたっては、これまでの教育実践における連携や授業実践上の課題をあらためて検討する必要がある。特に、授業実践を子どもの視点から振り返ることで、子どもへの理解を深めたり、授業を見直すための気づきを得たりすることができれば、それが「一人一人の教育的ニーズに応じた授業づくり」に結びつくものと考えられる。

そこで、本研究においては「授業研究」をその中心に位置づけ、「授業の構想」—「授業実践」—「授業研究」—「授業の改善」といった授業づくりのサイクルの中で、子どもの「教育的ニーズ」を把握することや、適切な教育的支援とはどうあるべきかを明らかにしていきたい。

【授業づくりのための構想】



## III 研究計画

第1年次

— 子どもの視点から振り返る授業研究を通して —

第2・3年次

— 保護者との連携を通して —

## IV 第1年次の研究

### 1 研究の目的

授業研究を通して、「教育的ニーズに応じた授業づくり」に向けた課題や具体的な取り組みの視点を明らかにする。

### 2 研究の内容・方法

研究協力校（郡山市立桑野小学校、県立あぶくま養護学校）において、以下の内容・方法で取り組んだ。

#### (1) 協力校における課題の整理

教師が抱える課題や保護者との連携の状況、「個別の指導計画」等の作成状況を整理する。

#### (2) 授業実践及び参観

- ① 授業参観 —ビデオ撮影—
- ② 授業者の内省（授業者自身の振り返り）
- ③ 参観者の感想・センター所員の感想
- ④ 「内省」と「感想」の整理

#### (3) 授業研究会

子どもの視点から、授業の目標や内容、教材、あるいは教師のかかわりなどを検討する。

### 3 第1年次の成果と課題

#### (1) 成果

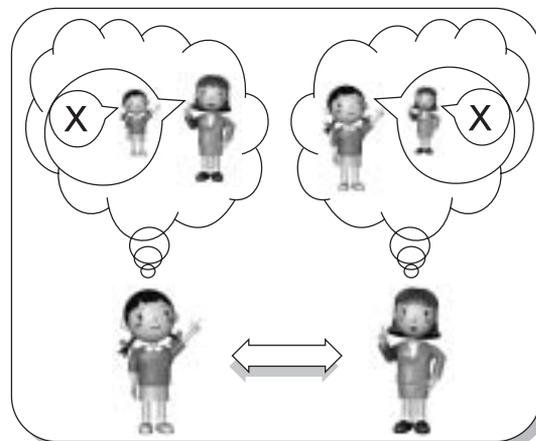
- ① 「授業づくり」においては「授業研究」が重要な役割を果たす。

教師自身の「子どもへの理解」が「教育的ニーズ」を把握する上で重要であるが、「子どもへの理解」は授業研究を通して深まる。また、授業者の内省（授業の振り返り）を踏まえて参観者が感想や意見を話し合うことで、授業者の抱える課題が解決に向かったり、授業を改善する視点が明らかになったりする経過をみることができた。授業研究は、「教育的ニーズに応じた授業づくり」に向けた教師間の連携として重要な役割を果たした。

- ② 「子どもの視点」から授業を振り返ることが授業の改善につながる。

授業研究においては、子どもの視点から授業実践を振り返ることにより、「子どもの思い」と「教師の思い」の「ずれ」が明らかとなった。この「ずれ」は、本センターのプロジェ

クト研究「子どもの心と向き合う教育実践に関する研究」（平成12～14年度）で構図化した、子どもから見た教師と教師から見た子どもとの相互のコミュニケーション関係における「ずれ」であった。



研究紀要第17号「基本構図3」より

この「ずれ」に教師自身が気づくことで、子どもと教師の関係が変わり、子どもを主体とした授業の改善につながることを示唆された。

授業研究を通して、こうした「ずれ」を発見し改善していくことが「教育的ニーズに応じた授業づくり」につながる。また、「教育的ニーズ」を把握し、「子どもの主体的な取り組みを支援する」上でも、今の授業実践を子どもの視点から振り返ることが大切であることが明らかになった。

- ③ 子どもと教師の相互のコミュニケーション関係が「授業づくり」の土台である。

子どもと教師の相互のコミュニケーション関係は、「相手の思いを受けとめて、自分の思いを伝える」という子どもと教師の「主体と主体」の関係である。

この関係があるとき、教師は子どもの立場に立って必要な支援を考えることができる。

教師が、子どもを主体として受けとめるということは、生活や授業場面において「子どもの思いを受けとめる」ことであり、これが「教育的ニーズに応じた授業づくり」の重要な視点である。授業研究においては、「授業づくり」の土台として、「子どもと教師の相互のコミュニケーション関係」を振り返ることが必要である。

## (2) 第2年次の課題

### ①「教育的ニーズ」を具体的に把握する。

授業研究会では、授業の目標や内容が「子どもの生活にどう結びついているか」、あるいは「その子どもにとって、なぜ必要なのか」など、あらためて一人一人の「教育的ニーズ」を明らかにする必要性が指摘された。特に、保護者から寄せられた「願い」や「ニーズ」と授業との関連が必ずしも明確でない現状もあり、「教育的ニーズ」の把握に向けて保護者とどう連携するかが大きな課題である。

### ②実状に応じて授業研究の内容や方法を工夫する。

授業研究会における話し合いの中では「率直な意見」が出されにくかったり、お互いの意見の関係があいまいになりがちであったりした。本研究においては、教師間の連携としての授業研究が重要な役割を果たすものであり、その進め方や授業研究会の持ち方についても、研究協力校の実状に応じて工夫することが必要である。

## V 第2年次の研究

### 1 研究の目的

特別支援教育の実現に向けては、保護者の協力や参画が不可欠である。第2年次の課題である「教育的ニーズ」を把握するための様々な連携の中でも、保護者との連携が最も重要であった。これまでの教育実践においても、保護者をはじめとして学校外の関係者と様々な形で連携してきたが、「教育的ニーズ」を把握するときには、あらためてその連携の在り方が問われるものと思われる。

そこで今年度は、「教育的ニーズに応じた授業づくり」に向けた実践の中で、保護者とどう連携していくかを明らかにすることを研究の目的として取り組むことにした。

### 2 研究内容・方法

研究協力校（前年度より継続して、郡山市立桑野小学校と県立あぶくま養護学校）において、以下の内容で取り組むことにした。

#### (1) 保護者と連携した「教育的ニーズ」の把握

「教育的ニーズ」を把握するために、保護者

とはどのような連携が求められ、どんな情報を把握する必要があるのかを検討する。

#### (2) 「個別の指導計画」の作成

「教育的ニーズに応じた授業」を実践するために、具体的な指導目標や内容などを設定した「個別の指導計画」が必要である。「個別の指導計画」については、「教育的ニーズ」という用語の有無も含めて、その位置づけや活用状況については、学校により異なる状況である。

研究協力校における作成状況を踏まえながら、「教育的ニーズに応じた授業づくり」に向けた「個別の指導計画」について検討する。

#### (3) 授業実践と授業研究会

研究第1年次の取り組みと同様に、授業参観（ビデオ視聴を含め）と授業者の内省を踏まえた授業研究会を行い、教師間の連携のもとで「教育的ニーズに応じた授業」を検討する。

#### (4) 保護者との連携についての考察

「教育的ニーズ」の把握から「個別の指導計画」の作成と活用を含めて、「保護者との連携」についての課題を検討する。

## 3 研究の経過

### 郡山市立桑野小学校

#### (1) 保護者と連携した「教育的ニーズ」の把握

##### ①保護者や関係機関との連携

子どもを理解するための情報としては、「家庭状況調査」や「健康の記録」、それまでの「指導記録」や「連絡帳」などを含めて、既に様々な様式が作成・活用されている。

この他に桑野小学校では、「保護者のニーズ」として「できるようになって欲しいこと」や「減らしたり、なくしたりしたいと思っていること」、「子どもの生活環境」としての「生活地図」と「日常生活のスケジュール」をアンケート形式で把握している。また、関係する医療関係者を交えた「懇談会」を実施し、医療面からの助言を得ている。

②情報の整理と共有

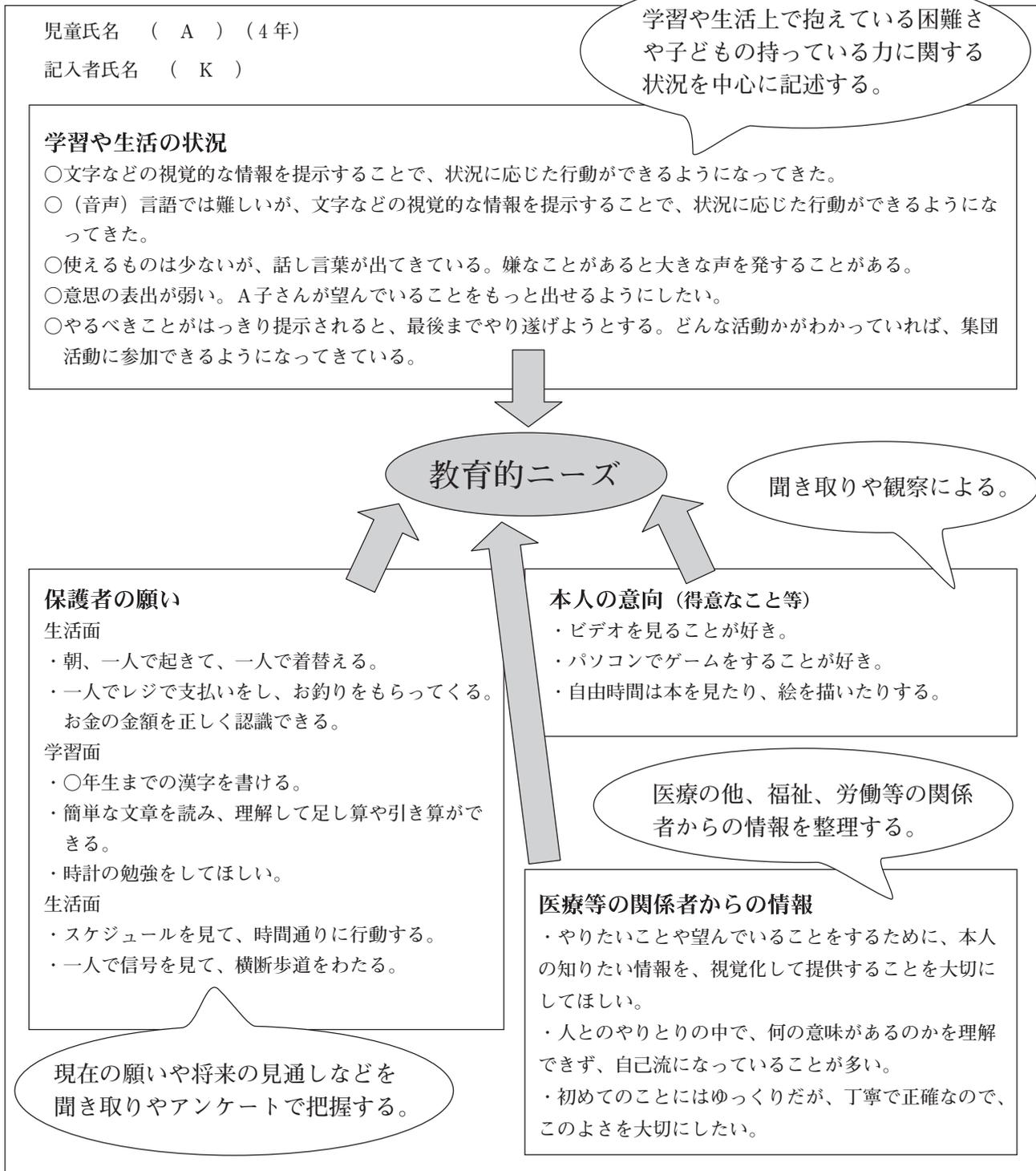
「教育的ニーズ」を把握しようとするとき、様々な情報を保護者と共有することが必要である。そのための様式として、当センターの研究紀要（平成12年度）における「個別の指導計画」（様式1）を参考に、下のような資料（Aさんの事例）の作成を試みた。

作成にあたっては、生育歴や諸検査の結果

など学校として把握している情報以外で、保護者と共有する必要があると思われる情報のみを整理した。

また、「学習や生活の状況」の欄には、教科などの観点を設けずに、子どもが生活や学習上で抱える困難さにかかわる状況と教師の願いを中心に記述した。

「個別の指導計画」（様式1）

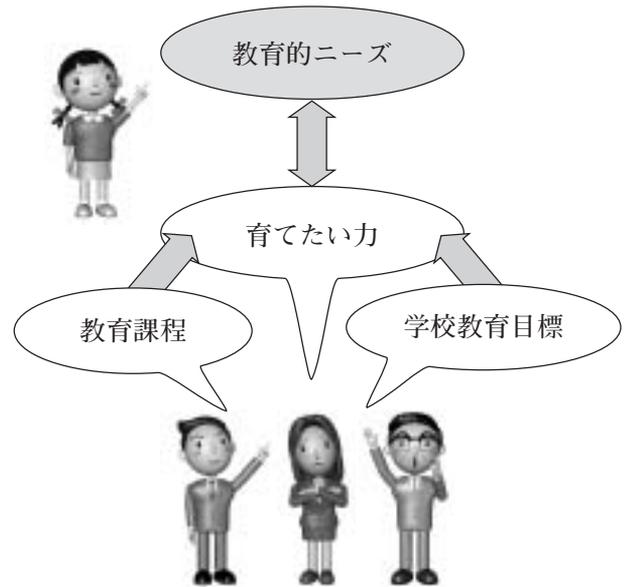


### ③「教育的ニーズ」の把握に向けて

子どもを理解するための様々な情報から、どのようなプロセスで「教育的ニーズ」を把握するのかを明らかにする必要がある。このとき、保護者に対して教育内容や「教育的ニーズ」を把握することの趣旨を説明するための手だてが必要と考えた。

そこで、学校の教育目標をふまえた「育てたい力」の内容を検討し、教育課程を編成する領域・教科との関連を以下のように整理した。そして、「育てたい力」の観点から、子どもの「教育的ニーズ」を把握することにした。

【教育的ニーズを把握するプロセス】



学校教育目標 「豊かな心を持ち、たくましく生きる心身共に健康な人間の育成」  
「健康な子」「思いやりのある子」「進んで学習する子」

育てたい力の内容表（桑野小学校特殊学級試案）

観 点	主 な 内 容	主に関連する領域・教科
主体的に 学習する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 目的や見通しをもって、自分から取り組む。</li> <li>○ ことばや数などの情報を読み取り、自ら考えて判断（行動）する。</li> <li>○ 「わかる」「できる」といった満足感や成就感を味わう。</li> </ul>	国語・算数
健康に生活する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 健康や安全、清潔に気をつける。</li> <li>○ 運動に親しむ。</li> </ul>	生活…「健康・安全」 体育 自立活動…「健康の保持」
身近な人と かかわる力	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 自分の意思を表現する。</li> <li>○ 他者の意思を理解する。</li> <li>○ 集団活動に参加する。</li> </ul>	生活…「遊び」「交際」 「決まり」など 自立活動… 「心理的な安定」 「コミュニケーション」 特別活動 音楽 体育
家庭や地域での 生活に必要な力	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 生活に必要な情報を適切に取り入れたり、活用したりして、やりたいことや望んでいることができるようにする。</li> <li>○ 生活に必要な技能を身につける。</li> <li>○ 身近な社会や自然とのかかわりについて関心を深める。</li> <li>○ 余暇時間を楽しむ。</li> </ul>	自立活動… 「心理的な安定」 「環境の把握」「身体の動き」 生活…「基本的生活習慣」 「金銭」「役割」 「手伝い・仕事」 生活…「社会の仕組み」 「自然」「公共施設」 特別活動 音楽 体育 図工

④保護者や医療関係者との話し合い

「保護者の願い」と教育課程との関連

「保護者の願い」と学校の教育内容との関連を説明するために、「育てたい力の内容表」を活用した。

Aさんの場合は、「保護者の願い」に日常生活の指導や教科指導の具体的な内容をあげているが、それらが「家庭や地域での生活に必要な力」や「主体的に学習する力」にかかわる指導内容であることを説明し、適切な目標を設定して指導していくことを伝えた。

また、「保護者の願い」としてはあげられていないものの、「健康に生活する力」として運動に親しんだり、「身近な人とかかわる力」として意思を表現したり理解したりすることも大切な教育内容であることを説明した。

子どもが抱える困難さの共通理解

次に、「教育的ニーズ」を把握するため、Aさんが生活や学習の場面でどんなことで困っているのかについて、個別の指導計画（様式1）に整理した情報をもとに共通理解を図った。そして、子どもが困っている状況を改善するために必要な支援について検討した。このとき、医療関係者から「Aさんにとってわかりやすい視覚的な情報を大切にすること」や「ゆっくりではあるが、ていねいにできることを大切にしてほしい」などの助言があり、様式1に書き加えた。

Aさんの教育的ニーズ

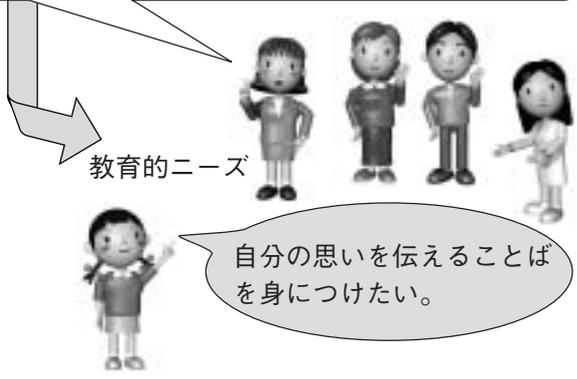
話し合いを踏まえて、担任教師はAさんの「教育的ニーズ」を検討し、次のように記述した。

教室環境の工夫やスケジュールの活用など、わかりやすい状況づくりを通して、Aさんは、自分から文字を読み、活動に見通しをもって行動することができるようになってきており、今後も継続する必要がある。

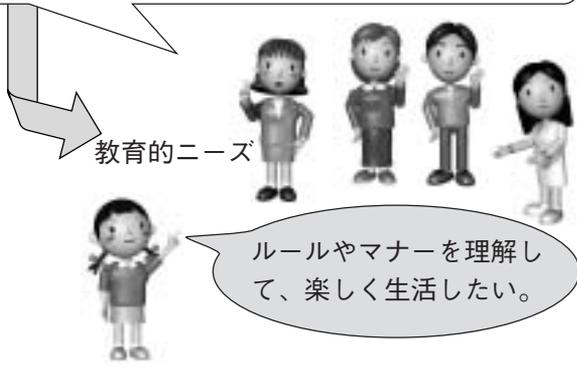


Aさんが、自分のやりたいことを実現するためには、周りの人と折り合いをつけなければならないこともある。Aさん自身がやりとりを必要としており、やりとりをしようとすることも多くなってきた。

視線や表情などを含めたAさんのことばで自分の思いが「伝わる」ことや「受け入れてもらえる」ことが実感できるよう、Aさんにとって心地よいやりとりの環境をつくるのが大切である。その中で、自分から伝えようとするAさんの主体性を育むことが重要である。



「保護者の願い」でもある知識や技能は、「家庭や地域での生活に必要な力」として身につけさせたい内容である。



「教育的ニーズ」は、教師が保護者や医療関係者との話し合いの中で共有できた内容をもとに、子どもの立場から記述した。これは、子どもの視点から振り返ることが授業の改善につながることを確認した第1年次の研究を踏まえて、子どもの視点から授業づくりに取り組みたいと考えたためである。

## (2) 「個別の指導計画」の作成

今まで、学級として指導形態ごとの年間指導計画は作成していたが、あらたに「個別の指導計画」を作成することにした。「個別の指導計画」は、それぞれの指導形態ごとに、一人一人の指導目標や指導内容を明確にし、「教育的ニーズ」や「育てたい力」との関連を図るとともに、保護者に説明できるよう記述することにした。また、その時々の評価や反省と、さらに目標の修正にも対応できるよう以下のような様式を作成した。

Aさんの「国語」の「個別の指導計画」（記入例）

<b>今年度の目標</b> （長期的） ひらがな文を読み取って行動したり、自分で文を組み立てて表現したりすることができる。		
○月 ○日 ～	<b>目標</b> （短期的） 動作を表す文を読み取って行動することができる。また、教師の動作を見て文字カードを構成し、文で表すことができる。	
	<b>指導内容・項目</b>	<b>方針・手だて</b>
	・文字（音声言語） と動作の対比 「動詞」及び 「名詞＋動詞」	ひらがな文字を使って、自分で選んだり考えたりできるような学習状況を工夫する。 また、Aさんの思いを受けとめながら、Aさんにわかりやすい情報を提示し、安心して取り組み、成就感を味わえるようにする。
<b>評価・反省</b>		
月日 ～	<b>目標</b> （短期的）	
	<b>指導内容・項目</b>	<b>方針・手だて</b>
	<b>評価・反省</b>	

## (3) 授業実践と授業研究会

### ア 授業の構想（Aさんの国語）

#### 指導内容の検討

国語の授業では、「絵カード」に合わせて「ひらがな文字のカード（名詞や動詞）」を選んで文に組み立てたり、短い文に合うことば

を選んだりするなどの課題に取り組んできた。さらに、学習したことが生活場面でもいかせよう、ひらがな文を読み取って実物を操作したり、教師の行動を見て文字（単語）を構成（表出）したりする課題も取り上げることにした。

#### 教育的ニーズとの関連

「自分の思いを伝えることばを身につけたい」という教育的ニーズの背景に、「自分のやりたいことを実現するためには、周りの人と折り合いをつけなければならないこともあり、Aさん自身がやりとりを必要としている」ことがあった。

Aさんにとっては、単に「使える文字カードを増やす」ことや「音声言語を増やす」ということが目的ではなく、「身近な人とかわる力」としての「自分の思いを相手に伝えること」と、「相手の思いを受けとめること」が必要であると考えた。

### イ 授業実践

①  ← □の文字カードを組み合わせた文を提示する。

のり	}	を	}	いれる
はさみ				だす

②  提示された文を読んで、→ 「はさみをいれる」動作をするAさん。

③  ← 教師の動作を見てから文を構成する課題になったとき、文字カードを手にして困った様子のAさん。

④  Aさんの様子を見て、→ 「だす」「いれる」を絵に描き、ことばと動作を確認する教師とAさん。

授業者の内省

Aさんの「やるぞ!」という意欲が表情や言葉に表れていた。また、わかりにくい学習状況であったため、「困っています。ヒントを下さい。」という姿勢をたくさん見せてくれて、しっかりやりとりできていると感じた・・・



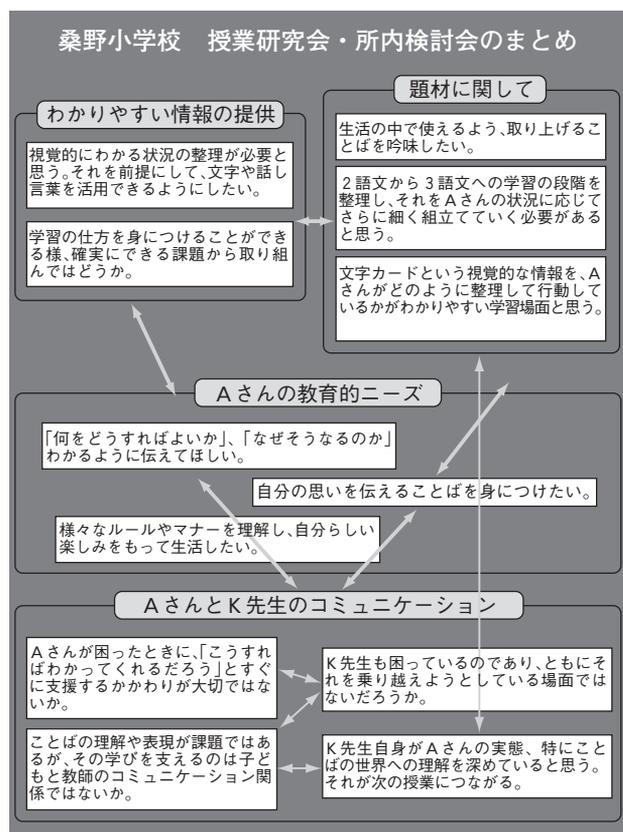
ウ 授業研究会及び所内検討会



← 授業研究会 (桑野小)

↑ 所内検討会

授業のビデオを視聴し、授業者の内省を踏まえて話し合った。主な感想や意見は、内省にもあった「Aさんが困った場面」に関する内容が中心であり、それらを教育的ニーズとの関連で以下のように整理した。



(フリーソフト[Idea Fragment 2]を活用)

エ 授業の改善

感想や意見を教育的ニーズとの関連で整理したことにより、「教育的ニーズに応じた授業づくり」に向けて授業を改善する視点が明らかになった。

学習状況の工夫

「何をどうすればよいか」がわかりにくい状況であり、視覚的にわかるような学習環境の工夫や、確実にできる課題から段階的に指導を進めることが必要である。また、Aさんの生活の中で使われることばを教材として取り上げられることを検討する。

学びを支えるコミュニケーション

「Aさんが困った場面」では、授業者も困っている状況であった。このとき、授業者は「だす」「いれる」を絵で描いて確認するなどAさんの立場に立って支援を工夫し、Aさんはそれを手がかりに困った状況を乗り越えている。AさんとK先生との間には、「相手の思いを受けとめつつ、自分の思いを伝える」という相互のコミュニケーション関係があり、その背景には日頃培われた信頼感や安心感があると思われる。

授業は、「個別の指導計画」に設定した目標を達成することを目指す取り組みであるが、それを支えるのは子どもと教師のコミュニケーション関係であり、それがAさんの教育的ニーズと深く関連すると考えることができる。したがって、授業の改善に向けては、取り組みの過程におけるAさんと教師とのコミュニケーションの視点を大切にすることが必要であり、その結果として目標の達成状況を問うべきであると思われる。

(4) 保護者との連携についての考察

「育てたい力の内容表」の作成過程を含め、保護者の願いと授業の関連を説明したことで、保護者から「学校で力を入れている指導内容がわかった」という感想があった。また、領域・教科の内容を、一旦、「育てたい力」として整理して、わかりやすく説明したことは、学校の教育内容を理解するうえで効果的であったといえる。

しかし、「個別の指導計画」に基づく授業実践の評価・反省について説明することは今後の課題として残された。また、学校での取り組みを家庭でも共有していかせるよう、「個別の指導計画」の活用などを保護者との連携のもとに検討する必要がある。

(1) 保護者との連携

保護者との連携の場は、日常的な連絡の機会をはじめとして、次表に示したような年間予定が組まれている。

【保護者・学校一連携スケジュール】

	保護者	学校
前期	保護者アンケート  個別懇談週間 家庭での取り組み用紙	指導引継ぎ 個別の指導計画見直し  スタッフ会 評価週間
後期	個別懇談週間 「あゆみ」「個別の指導計画」配付 家庭での取り組み用紙 個別懇談週間 「あゆみ」「個別の指導計画」配付	評価週間  個別の指導計画見直し

年度当初の保護者アンケートは、保護者の願い等の意見を聞き取り、個別の指導計画に生かし授業を充実するために実施されている。アンケートの内容が個別懇談に生かされ、日々の指導はもちろん、指導方針について保護者・学校間の共通理解を図るための情報として活用される。

【保護者アンケート（個別の指導計画に関するアンケート）】

個別の指導計画に関するアンケート  
児童生徒氏名

- 1 現在お父さん/お母さん/お兄さん/お姉さん/お友達にできるようなって欲しいと思っていることを具体的にお書きください。なかでも特に重点に考えている項目については、◎をつけてください。思い浮かばない時には、全部の欄をうめなくてもけっこうです。

項目	具体的な内容
生活面に関わる内容 ・ 食生活 ・ 着替え ・ 歯磨き など	
社会面に関わる内容 ・ 人とのかわり ・ あいさつ ・ 交遊ルール ・ 買い物 など	
学習面に関わる内容 ・ 文字の読み書き ・ 数をかぞえる ・ 絵をかく など	
運動面に関わる内容 ①歩く、走る、とぶなどの基本的な運動 ②ボールを投げ、うつげる、バット・ラケットで打つ、跳ぶなどの高度な運動	
その他の特記事項 ・ 健康状態に関して ・ あそびに関して ・ 好きなことに関して	

- 2 今年度取り組みたいと思っていること  
今年一年間家庭で取り組んでいきたい内容等についてお書きください。

本年度家庭で取り組みたい内容：
-----------------

家庭での取り組み用紙は、家庭での生活で大切にしていることや課題として取り組んでいることが記載され、保護者と学校間で共有される。この情報は、経過の振り返りや指導方針を確認する資料となっている。

【家庭での取り組み用紙】

部 年 組 氏名	
家庭での取り組み	
取り組むこと	取り組みの様子と結果

(2) 「個別の指導計画」の活用

校内研究においては、「個別の指導計画を生かした授業に関する研究」（3年次）に取り組んでいる。

本人や保護者の願いを反映した授業実践をするために、いかに「課題」を焦点化し目標を設定するか、そして「個別の指導計画」の活用を図っていくかについて、授業実践を通じた研究を深めている。

あぶくま養護学校で作成している「個別の指導計画」の書式は2つある。様式1には、実態と指導目標をはじめ、願いや重点課題、年度の目標と指導の手だてを記入する。様式2には、領域・教科別に指導目標や内容を記入

【(様式1) 個別の指導計画 (実態と指導目標)】

(B君の記入例)

個別の指導計画【実態と指導目標】			
○部○年○組	氏名	担任	
生徒	基本的生活習慣にかかわる内容（食事、歯磨、身支度、あいさつ、清潔、安全性への意識等）		
生徒	コミュニケーションにかかわる内容（意思伝達、ことば、決まり、基本概念の理解等）		
生徒	国語・数学にかかわる内容（色、形、長さ、位置関係、文字の判別、文字と実物の対応等）		
生徒	運動にかかわる内容（からだを動かす喜び、粗大運動、手指の動き、協応動作、模倣、調整、持久力等）		
生徒	その他の特記事項（身体状況、興味・関心、性格や行動の特性、社会性等）		
本人の願い	保護者の願い	教師の願い	医療機関
・自分の気持ちを覚えて欲しい。	・集団に溶け込んで参加できるようにしてほしい。一行事を楽しくしてほしい。	・文字を書くこと、読むことに親しんで欲しい。	
・わかりやすい状況で活動したい。	・待つことができるようになって欲しい。	・数字や文字、音楽をたよりに記憶して活動に取り組んで欲しい。	
	・その場にあった言葉が使えようになりたい。	・自分の気持ちを、言葉、文字等を使って伝えて欲しい。	
生徒の課題（重点課題、大切にしたいこと）			
○自分の気持ちを、文字や言葉を使って相手に伝えたいという気持ちを育てる。			
○教師の気持ちを、文字や言葉で知ることができ、自分の気持ちや行動を調整することができる。			
○様々な活動を経験することで、活動のレパートリーを増やすことができる。			
本年度の指導目標		指導の手だて	
○文字を書いたり、読むことに親しむことができる。		○興味・関心のあるキャラクターを使ったパネルや遊具の吹き出しを使った教材等を用意する。	
○文字や数字等を頼り思考し、操作等をして分類等を行うことができる。		○スライツ等を使って、自分で正解を確認することができるようにする。	
		○分類板等を使って、チップ等を使って思考できるように状態を整える。	
		○文字等を重ねながら、コミュニケーションをとることで、自分の話している言葉、教師の話している言葉などを振り返ることができるように工夫する。	
		○新しい課題や、これから始めようと考えている活動への交渉については、労を惜まず文字や絵、サイン等を積極的に使って交渉する。	

し、変容の記録や評価が追記される。この「個別の指導計画」は、保護者に対して開示され、学期終了時には変容の記録や評価が記載されて保護者に配付される。

【(様式2) 個別の指導計画 (指導目標と評価)】

個別の指導計画【指導目標と評価】

前期	○学部○年○組	生徒氏名
学校での取り組み		
教科等	○目標・活動内容及び手段で	○記録(変容・評価)
日常生活の指導	○自分の気持ちを伝えながら、教師と交渉をし、納得して日常生活の様々な活動を行うことができる。 「スケジュール」	
生活単元学習	○自分の役割や活動内容を理解し、選択して活動することができる。 ○友達や教師とかわり合いながら活動することができる。 ①創作活動・探索活動 ○モデルを見ながら、道具や素材等を自分で選択、工夫、思考しながら活動することができる。	
作業学習	○道具や素材等に十分に親しみながら、「作品」を作ることができる。 ○モデルを見ながら、作業工程、出来上がりをも自分で想定しながら作品作りをすることができる。	
美術	○さまざまな技法を体験することによって、造形表現への興味・関心を高めることができる	
音楽	○さまざまな音楽に親しむことができる。	
自立活動	○文字に親しんで活動することができる。(自立活動の時間) ○チップ等の絵や文字を頼りに仲間わけをすることができる。(自立活動の時間) ○文字や数字等の痕跡系の信号を媒介しながら、自分の気持ちや他人の気持ちを「振り返りながらやりとりをすることができる。(学校生活全般を通して) 「文字に親しもう!」 ○文字をよいたり、読むことに親しむことができる。 ・漫画の吹き出しを、見本を見て書く。「仲間分けをしよう!」 ○文字や絵を見ながら、仲間分けをすることができる。 ・文字、絵チップを操作しながら学習をする。 「いっしょに遊ぼう!」 ○遊びのレパートリーを増やすことができる。 ・パソコンやボール遊び等で様々な遊びを提案する。	

今回のプロジェクト研究では、協力学級の研究授業(2回)を通して、「願い」「指導課題」「指導目標」に着目し、授業の充実を図る上で必要な保護者と学校間の連携に関して考察した。

(3) 授業研究

第1回授業

ア 授業の構想

今回の授業研究では、B君を対象として取り組むこととし、まずスタッフ会(同学年指導者グループ)において、KJ法\*1を活用した実態把握を行った。

保護者アンケートや個別懇談を通して把握した保護者からの情報(保護者の願い等)を加え、指導に関わる複数の教師がとらえている情報を出し合うことで、実態と課題把握を深めた。

保護者の願いには、苦手なこと、今つまずいていることに対する願いがある。今できると

\*1 川喜田二郎氏(元東京工業大学教授)が考案した創造性開発(または創造的問題解決)の技法

ころ、伸ばしたいところに注目して取り組むためにも、保護者の願いにある背景を理解し受け入れ、指導課題との関連をおさえることなど、願いと課題に関する話し合いが行われた。

さらに、わかりやすい状況をつくるためには、見通しの持ちやすい状況と持ちにくい状況の違いについて振り返り、教材の示し方や展開など、具体的ななかかわり方を確認した。

あぶくま養護学校では、「本人・保護者・教師の願いを反映した課題の焦点化と指導目標の設定」に関する内容を研究として取りあげている。三者の願いを考え、指導課題の焦点化と指導目標を設定する過程の中で、生徒の視点で考える教育的ニーズが見えてくる。

【実態及び課題の整理(KJ法を活用)】



【スタッフ会での協議(教材について話し合う)】



イ 授業実践

自立活動「べんきょうしょう」(個別課題学習)

コミュニケーションに関する課題を取りあげ、教材(具体物)を通じた生徒とのやりとりに着目し、指導目標や内容を設定した。自立活動5領域の中の「コミュニケーション」に視点をあてた授業を実施した。

この自立活動の授業でねらいとしたのは、次の3点である。

- ①自分の思いを相手に伝えたい気持ちを持つ。
- ②相手の気持ちを文字や話しことばで知り、自分の気持ちや行動を調整する。
- ③活動のレパートリーを増やす。

実際の指導においても、活動の展開においてわかりやすくかわることに留意した。たとえば、生徒が納得して行動するために自分自身で活動を終了するまで待つことや、教師が生徒の気持ちを押し量りながら次への活動に向けての提案をすることなどである。

わかりやすく学習するためには、教材の工夫が必要である。そこで、自作教材を生徒の視点から創意工夫して製作し、その教材を通してわかりやすい学習に結びつけようとした。

【授業場面（漫画の吹き出しを考えて完成する）】



【教材 1（漫画の吹き出しを考える）】



【教材 2（パズルを完成させる）】



【教室にある自作教材】



【一日のスケジュールボード】



## ウ 授業研究会

学習課題や教材、生徒と教師とのやりとりの他、保護者との連携に関する話題が取りあげられた。

保護者との連携に関して、次のようなことが協議の中で話し合われた。

- ・保護者の願いには、その時々で「ゆれ」がある。
- ・学校と家庭の状況を相互に正確に伝え合うことができない場合がある。
- ・実態の把握状況に「ずれ」があるとき、段階的にとらえ方が必要である。
- ・保護者の考えを聞く姿勢、納得し合える信頼関係が重要である。
- ・生活とのつながりから課題を見直す視点がほしい。

## エ 授業の改善（目標の再吟味）

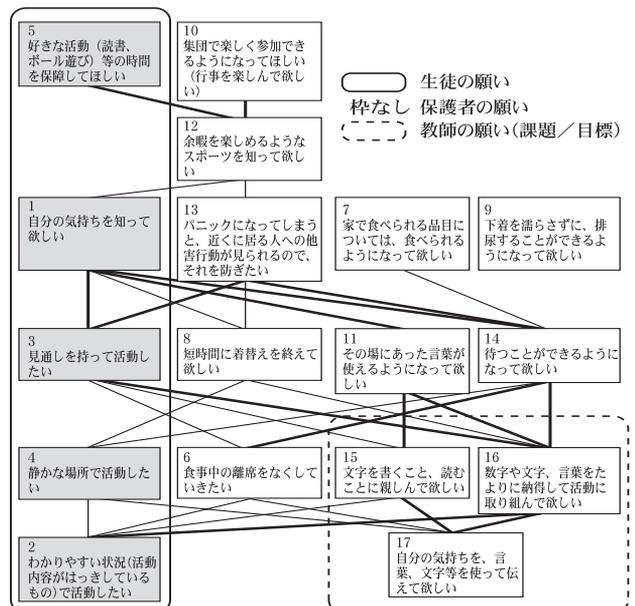
指導課題・目標の関係を全体的にとらえるために、ISM (Interpretive Structural Modeling)\*2の手続きを用いた情報の整理を試みた。

ISMは、より客観的に階層構造を導き出す方法で、次の特長がある。

- ①問題を明確にする。
- ②構造を視覚的（階層構造）に示す。
- ③直感や経験的判断による認識をより客観的に整理し直す。

課題や目標の関係を階層的に図示することで、それぞれの関係を視覚的にとらえやすくした。

【階層構造化した図（願い、課題、目標）】



教師が願いや課題、目標の関連を図式化して見直したことで、保護者の願いへの理解が深まり、設定した指導課題や指導目標について授業者自身が再び振り返る場面となった。

課題や各目標間の関係の重み付けが十分でなかったことで、明確な階層関係まで引き出すことができなかったが、目標を全体関係の視点から再吟味することで、指導に関する振り返りを深めることができた。

生徒の願い（実線枠）は、教師が生徒の視点で考えた表現であるが、教育的ニーズに結びつく内容である。「わかりやすい状況で活動したい」、「見通しをもって活動したい」などの5項目は、自立活動はもちろん、日常生活の指導や生活単元学習などにおいて、指導を考えたときの要点となった。

目標を吟味したことによって、次のような新たな気づきを得られた。

- ①保護者の願い、本人のニーズ、教師の願いの重なる部分の理解
- ②保護者の願いの優先順位
- ③授業で重点的に押さえないといけないこと

保護者と教師の共通した目標にコミュニケーションがある。保護者アンケートや個別懇談で話し合われた保護者の思いを受けて、コミュニケーション上の課題を解決するためには、信頼関係をしっかりつくることを優先すべきであると、教師は強く認識した。さらに、学校生活の「わかりにくさ」がつかまずきの要因となっていることから、わかりやすい状況づくりを通じた信頼関係の構築を中心課題と考えた。

わかりやすい状況は、それぞれの場面で注目したい内容が受け入れやすい形で示されており、必要な情報を自ら取り入れて行動の調整に生かせることが重要である。適切な教材を用意することで、生徒にとってわかりやすい状況づくり出すことになる。このわかりやすい状況の中でかかわることで、コミュニケーションを深めることができると考えた。

※2 ISM(Interpretive Structural Modeling)法は、複雑な構造を分析して、体系的に把握するための手法

## 第2回授業

### 生活単元学習「作って食べよう！」 ～ピザを作ろう～

#### ア 授業の構想

授業を行う担当教師（4名）において、目標、単元構成や展開、生徒一人一人の学習活動について生徒の視点から吟味した。さらに、「個別の指導計画」上の重点課題の点からも授業を見直した。

「将来の自立を考えて、自分の食事を作る（調理）力を育ててほしい」という保護者からの願いがあり、単元計画を立てる際、考慮した。

活動工程がわかりやすい調理を取りあげて単元設定した。自立活動においてねらいとしている見通しを持って取り組む力を、実際の生活に結びつく調理の中で展開することで、教師とのかかわりと、自らの行動を調整する学習経験をさらに深めることをねらいとした。

教師は、自ら選択し遂行できる状況を設定することで、自己選択→自己決定→自己実現の流れを大切にしたいかかわりができるという意図をもち授業を構想した。

単元としては、次の二つの目標を設定した。

- ①道具や素材を自ら調べて選択し、主体的に操作することができる。
- ②自分の活動を振り返りながら展開することができる。

【授業場面（ピザの材料を切る）】  
作業台には手がかりを提示



#### イ 授業実践

素材や道具を十分に調べることで、見本を見ながら自ら考えて行動することを重視し、わかる状況づくり（考える手がかり・見通しをもつ手がかり）とかかわり方（誘い・提案）に配慮した授業を展開した。

【教材の工夫（調理の流れを自ら確かめる手がかり）】



写真や調理材料（実物）、文字など視覚的情報を活用して活動の流れを提示したり、提示する情報がわかりやすいように提示板を使用したりと、教材や活動しやすい状況を生徒の視点から工夫した。

「待つことができるようになってほしい」「その場にあったことばが使えるようになってほしい」等、保護者の願いやその背景にある思いに結びつく授業となった。

#### ウ 授業者の内省

自ら考えて行動する手がかりとなる調理レシピからの情報を生徒自身が使い、自らの判断で調理活動を展開する行動が見られた。自立活動の課題学習で目標としてきた自分の気持ちや行動を自ら調整する力が、生活単元学習でもいかされた。教材を吟味し、自ら考え、自らの力で課題解決しやすい状況づくりを工夫した成果が、調理に取り組む生徒の主体的な行動に現れた。

将来の自立に向けて身につけてほしい力の一つとして、食事に関わることを保護者は取りあげていた。教師と保護者で話し合われたことのある食事に関して、ねらいを明確にした調理を授業に組み入れられたことで、学校での授業に対する保護者の関心を高め、より連携が深まった。

#### (4) 保護者との連携

子どもの成長についての保護者の気づきと担任の気づきが共有されることで、新たな気づきが明らかになり授業の充実にいかされた。そし

て、保護者と学校のさらなる連携の深まりを生み出している。

「集団活動に参加してほしい。」などの保護者の願いや、その背景にある内容を理解しようとする姿勢が、保護者と担任のつながりを強めてきた。

また、「生徒自身が納得して活動すること」や「選んだ活動を充実させ展開すること」に留意し、生徒主体の信頼関係づくりに取り組んできたことが、生徒と教師のコミュニケーション関係を深めることにもつながった。

生徒の変容を具体的事実として保護者と担任が伝え合うことで、複数の気づき生まれさらなる指導に生かしていくことができる。このように、教育的ニーズに応じた授業を創造していくには、評価を含めた授業づくりのプロセスに、保護者がかかわることが重要である。

今後の課題としては、授業の充実においても保護者とのよりよい連携を深めていくことがあげられる。

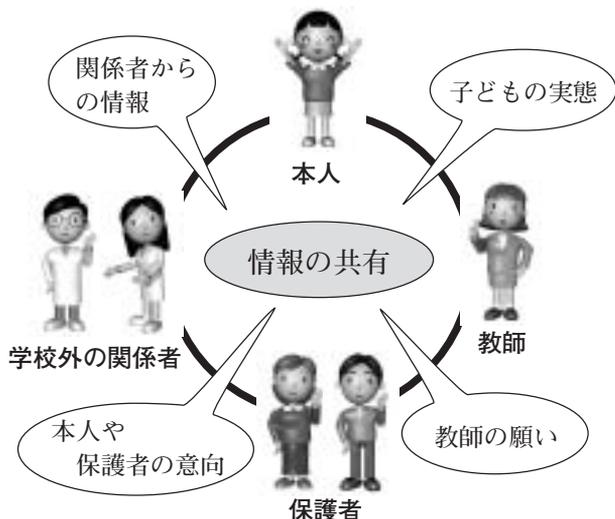
一つの願いの実現に近づく一方で、新たな願いや目標が出てくる。その願いや目標が今のニーズに合っていることなのか、保護者との話し合いの中で検討し、願いや目標を授業実践を通して実現していくことが課題となっている。

## VI 研究の成果と課題

### 1 保護者との連携

#### (1) 必要な情報の共有

「教育的ニーズ」を把握するためには、「子どもの実態」の他、「本人や保護者の意向」や「教師の願い」、「医療等の関係者からの情報」などを保護者と共有することが必要である。



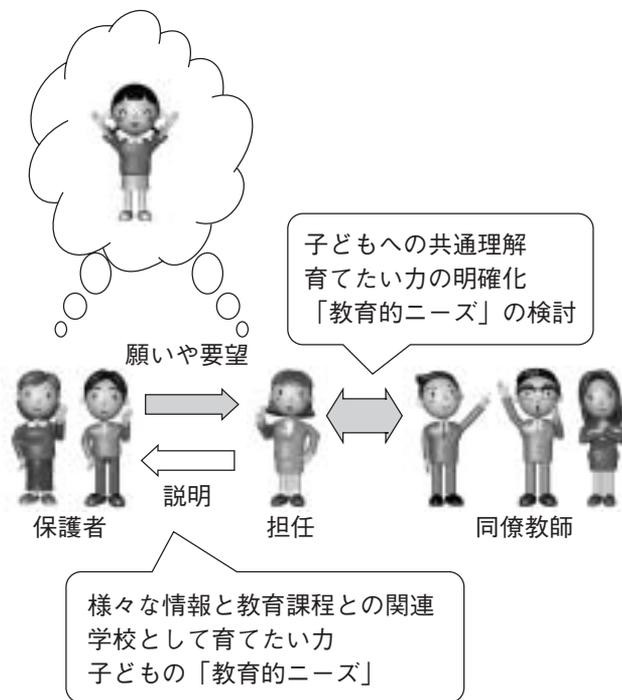
「子どもの実態」のとらえ方は、それぞれの学校で観点を設けるなどして整理しているが、あぶくま養護学校の実践にもあるように、「とらえ方のずれ」が生じることもある。保護者との連携で重要なことは、学校における情報だけではなく、保護者と共有できる子どもの姿を整理することである。また、「教育的ニーズ」を把握するうえでは「子どもが生活や学習上で抱えている困難さ」や「子どもの持っている力」など、子どもの視点に立った情報を共有することが重要である。また、医療等の関係者からの助言を含めて、共有すべき情報はできるだけ焦点化して、個別の指導計画等に整理することが必要である。

#### (2) 保護者の願いの受容

研究協力校においては、アンケート形式で「保護者の願い」を把握している。記入項目の設け方はそれぞれであるが、保護者からは生活場面で身につけて欲しいと願う技能面の課題を中心とした、具体的な願いがあげられていた。保護者の願いとして提出された事柄が、学校の教育内容とどう関連し、どの場面で、どういった手だてで指導されるのかを説明することが保護者との信頼関係を深めるうえで重要である。

このとき、保護者に対して、学校における教育内容をわかりやすく説明することが必要である。特に知的障害養護学校の教育課程を取り入れている場合、「日常生活の指導」や「生活単元学習」といった領域・教科を合わせた指導や、「自立活動」の指導については、保護者にはわかりにくい面があると思われる。

桑野小学校の実践では、学校教育目標を踏まえ、教育課程を編成する領域・教科の内容を、一旦「育てたい力」の観点として整理しているが、これは、保護者に学校の教育内容を説明し理解を得るうえで役立つものであった。さらに、「育てたい力」を複数の教師で検討したことは、子どもへの共通理解を図ったり、具体的な教育的支援の目標や内容を検討したりといった教師間の連携を深め、担任だけではない学校としての取り組みにつながることを示唆される。

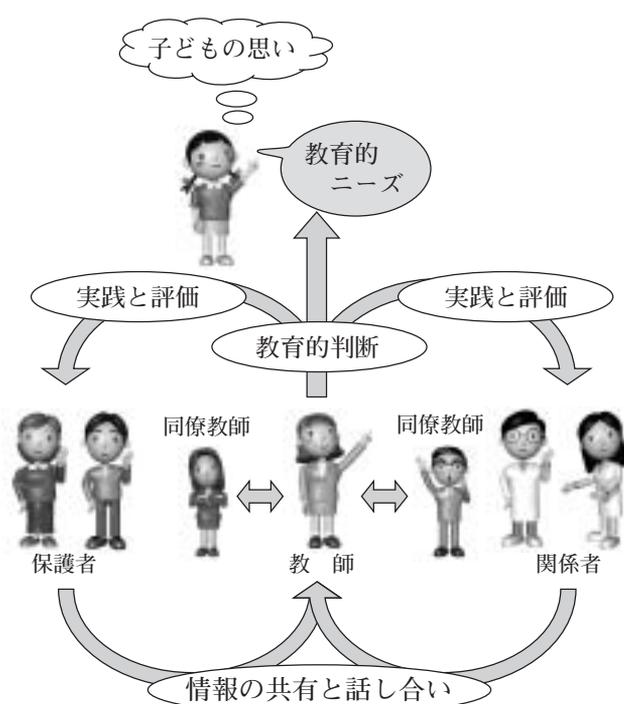


#### (3) 「教育的ニーズ」の把握

子どもを理解するための情報を共有し、保護者の願いを受けとめつつ話し合う中で、「教育的ニーズ」を明らかにすることが必要である。

桑野小学校の実践では、保護者の願いや医療関係者からの情報の整理と話し合いを踏まえて、「教育的ニーズ」を子どもの立場から記述している。また、あぶくま養護学校の実践では「保護者の願い」と「教師の願い」の重

なる部分を授業の重点課題と関連づけている。そこには、子ども本人を主体として受けとめ、子どもの思いを大切にしたい授業づくりをするための教師の教育的な判断がある。重要なことは、その教師の判断に保護者や学校外の関係者が関与する関係があることであり、こうした関係が「教育的ニーズに応じた授業づくり」の出発点となる。また、保護者にとっては、「教育的ニーズ」を把握するということが自体に、授業づくりに参画するという意味が込められる。したがって、「教育的ニーズ」の把握から、授業実践の経過や評価、修正といった一連の教育活動における連携が求められる。



また、本研究で「子どもが必要とする教育内容」ととらえた「教育的ニーズ」は、桑野小学校のように子どもの立場で記述することも考えられるし、あぶくま養護学校のように「重点課題」として記述することも考えられる。

記述の仕方は学校として検討する必要があるが、「教育的ニーズ」は、保護者はもちろん、学校外の関係者が理解し納得できる内容であり、授業との関連が説明できる内容でなければならない。

## 2 教育的ニーズに応じた授業づくり

### (1) 「個別の指導計画」の作成

保護者に対しては「教育的ニーズ」と授業の関連を説明することが必要である。そのた

めに、教育課程上の様々な指導形態の中で「何を目標に」「どんな指導内容・方法で」「何を学んだのか」を具体的に説明するための「個別の指導計画」の作成が求められる。

桑野小学校においては、学級として各教科等の年間指導計画は作成されているものの、まだ「個別の指導計画」が作成されていない状況であったため、その作成が課題となった。しかし、研究第1年次の授業研究でも明らかのように、「個別の指導計画」を作成していない状況であっても、現実の授業においては子ども一人一人に対する目標や内容を設定し、手だてを工夫している状況がある。つまり、個に応じることを大切にしてきたこれまでの授業実践は子どもの「教育的ニーズ」と無関係ではなく、むしろこれまでの教育実践を子どもの「教育的ニーズ」との関連で整理することから「個別の指導計画」の作成に取り組むことができるという一つの方向性を示している。

また、あぶくま養護学校で、作成した「個別の指導計画」を授業研究や保護者との懇談に計画的に活用しているように、「個別の指導計画」は、授業を充実させるために活用することが必要である。そのためには、指導の反省・評価を加えつつ、次の授業を創造的に積み上げていくための「個別の指導計画」の作成が必要である。この点で、「個別の指導計画」の作成は、一人一人のカリキュラムづくりと言い替えることもできるのではないだろうか。

### (2) 「教育的ニーズ」と授業実践

桑野小学校の実践では、子どもの視点から「教育的ニーズ」を把握したことで、教師の内面には常に「子どもの視点」が存在し、自分のかかわりを子どもの側からとらえつつ授業を展開していることが、授業者の内省から伺える。このとき子どもと教師の間には、第1年次の研究の成果で述べたような、子どもから見た教師と、教師から見た子どもとの相互のコミュニケーション関係が成立していると考えられる。

第1年次の授業研究会では、子どもと教師のコミュニケーション関係を振り返ることで、「子どもの思い」と「教師の思い」の「ずれ」

が指摘された。その経過を踏まえた今年度の授業実践では、教師がその時々の子どもの思い（思考や感情）を受けとめつつ、自分のかかわりを展開していた。これは「子どもの思いを受けとめて、自分の思いを伝える」という、子どもを一個の主体として受けとめたかかわりということができる。こうしたかかわりが、「子どもの主体的な取り組みを支援する」という特別支援教育の実現に向けて大切であると考える。

したがって、「教育的ニーズ」として把握される教育内容は様々であっても、**授業実践は子どもと教師の「主体と主体」の関係を土台に展開することが重要である。**また、研究協力校のように「教育的ニーズ」や「重点課題」としてコミュニケーションに関する教育内容があげられる場合は、子どもの思いを受けとめること自体が、子どもの「教育的ニーズ」と深くかかわるものと思われる。

### (3) 授業研究と授業の改善

あぶくま養護学校では、「本人の願い」や「保護者の願い」と課題や目標の関係を構造化する手続きを通して、授業を振り返る視点を明確にしたことが、その後の授業づくりに向けた授業者の気づきに結びついている。また、桑野小学校では参観者の感想や意見を教育的ニーズとの関連で整理することで、次の授業に向けた改善点を明らかにしている。

授業研究が、授業づくりに向けた教師間の連携として役割を果たすためには、視点を明確にするとともに、授業研究会で自分の意見や感想を自由に述べ合うことが必要である。また、指導内容や方法、あるいは教師の「かかわり方」としての指導技法に関する様々な意見や感想を、「教育的ニーズ」との関連で整理することは、適切な指導や必要な支援を明らかにし、教育的ニーズに応じた授業の改善に結びつく取り組みといえる。

## 3 今後の課題

### (1) 授業づくりに向けた保護者との連携

保護者とは「教育的ニーズ」の把握のみならず、授業実践の評価・反省のプロセスを含めて連携していくことが必要である。「個別の

指導計画」を活用する中で、どう連携していくかについて今後検討する必要がある。

### (2) 校内支援体制との連携

特別支援教育の実現に向け、本県においても校内委員会の設置や特別支援教育コーディネーターの指名が行われ、校内支援体制が整備されている状況である。

校内委員会やその中心的役割を担う特別支援教育コーディネーターの役割として、ガイドラインには「教育的ニーズ」の把握や「個別の教育支援計画」の作成、あるいは「個別の指導計画」の作成への参画などがあげられている。

これらは本研究とも深くかかわる内容であり、今後は、こうした校内支援体制と連携して研究を進める必要がある。

### (3) 通常の学級における支援

特別支援教育の対象として、通常の学級に在籍するLD（学習障害）やADHD（注意欠陥／多動性障害）、高機能自閉症などの子どもたちへの対応が大きな課題となっている現状がある。

本研究テーマである「教育的ニーズに応じた授業づくり」を、通常の学級を視野に入れて検討することが必要である。

#### 参考文献

- 1) 福島県養護教育センター（2003）  
「子どもの心と向き合う教育実践に関する研究」  
研究紀要第17号
- 2) 文部科学省 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議（2003）  
「今後の特別支援教育の在り方について」最終報告
- 3) 文部科学省（2004）  
「小・中学校におけるLD（学習障害）、ADHD（注意欠陥／多動性障害）、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン（試案）」  
使用ソフト  
須藤幸一：「Idea Fragment2」（フリーソフト）  
(<http://membar.nifty.ne.jp//nekomimi/lzh/ideafrg2.htm>)